

《書評》

『ケアする声のメディア：ホスピタルラジオという希望』

小川明子*著、青弓社ライブラリー、2024年

北出 真紀恵†

ホスピタルラジオをご存じだろうか。ホスピタルラジオとは、入院患者を慰め、回復を助けることを目的に設立されたイギリスの病院内の取り組みで、現在はほとんどの大病院にあるという。

本書は、ホスピタルラジオの営みを紹介しつつ、声のメディアがどのようにケアの役割を担い、社会の周縁に生きる人々をどのように包摂することが可能なのかを問う、ケアのメディア・コミュニケーションを展望した研究書である。

著者は、まずホスピタルラジオの営みに「ケア」の視点が含まれていることを指摘している。「ケアの倫理」とは発達心理学者のキャロル・ギリガンが提起したものであり、それは自立した人間を想定したうえで原理原則の公正な適用をめざす「正義の倫理」とは異なったもので、男性中心的な価値観のもとで見つけられなかった新たな倫理として発見された。そして、それは「すべての人が他人から応えてもらえ、受け入れられ、取り残されたり傷つけられる者は誰ひとり存在しない」（ギリガン, 1982=2022: 174頁）ことを理想とするものである。

この「ケアの倫理」は、おもに医療や福祉、教育の分野で論じられてきたのだが、2010年代以降、メディア・コミュニケーションの領域でも「ケアの倫理」からメディアについて再考する論考が相次いだ。たとえば、目の前の困っている人々に手を差し伸べ、社会的弱者の声を取り上げ、問題を可視化する「ケアのジャーナリズム」（林, 2011）、そして独自の情報や考えをほかの人と分かち合うための「シェアのコミュニケーション」や、人が癒やされ、励まされる「ケアのコミュニケーション」（小玉, 2012）など、「ケアの倫理」とメディア・コミュニケーションを具体的に結びつける研究が始まっている。本書もまたこうしたケアのメディア・コミュニケーション研究の系譜に連なるものであり、根本的に弱く、互いに依存する存在として人間を捉え、他者への配慮や社会的責任を重視した「ケアの倫理」のもとで、ラジオという小さな声のメディアがどのような意味を持つのかというのが著者の関心である。

本書の構成は次のとおりである。

「ケアするラジオ」と題する序章は、著者の入院患者の家族としての体験から始まる。閉鎖的な空間である病院では、入院患者も見舞う家族も、先が見えない不安や、孤独を感じずにはいられない。そんな時に、著者はイギリスのホスピタルラジオに出会う。しかし、ケアのコミュニケーション

* 立命館大学映像学部教授

† 東海学園大学人文学部教授
kitade@tokaigakuen-u.ac.jp

ンを必要とする場は必ずしも「病院」だけにはとどまらないはずである。たとえ「病院」という閉鎖空間にいても、孤独を感じている人々は少なからず存在する。著者は、排除されがちな人々をどのようにケアできるのか、ケアしあえる状況をメディアがどのように設定できるのかを問う。

第1章は「声のコンテンツ」を介したコミュニケーションがどのような特性をもつのかについて概観する。音声メディアであるラジオをめぐる先行研究に目（耳）配りし、ラジオという「声のコンテンツ」を「聞く」ことによって孤独感が癒やされ、社会とつながっているという感覚が得られる様子をみたうえで、人々が「声なき思い」をどのように声として発し、その声は、誰かとつながることができるのだろうかを問いかける。

続く第2章と第3章で、著者はイギリスへ飛ぶ。ここはイギリスのホスピタルラジオの紹介がなされるパートである。まずはイギリスにおけるホスピタルラジオの歴史を概観しつつ、一見キリスト教的チャリティにみえるホスピタルラジオの活動のなかの、自分たちで放送というメディアを作り上げ、関わりたいという欲望の存在にも光が当てられる。そして、現在のホスピタルラジオの運営がどのように展開されているのかについて報告される。ホスピタルから地域へと飛び出し、コミュニティラジオの免許を取得したウィンチェスターラジオは現在、地域コミュニティのメディアとして人々の孤独を癒やす役割が期待されるなど、ケアを必要としているのはホスピタルの中だけではないことがわかる。

第4章の舞台は愛知県豊明市の藤田医科大学病院である。今度は、日本で始まったホスピタルラジオ「フジタイム」の事例の紹介なのだが、実はこの「フジタイム」は、著者がとあるラジオ番組でイギリスの「ホスピタルラジオ」を紹介したことをきっかけに生まれたホスピタルラジオなのだそう。詳細な参与観察は、パーソナリティたちの声が聞こえてきそう。

第5章「孤立を防ぐ小さなラジオ：二つの実践から」は、ケアのコミュニケーションの展開部分である。高齢者施設でのイベントを居室に中継するという実践と、依存症など困難を抱えた人々がコミュニティラジオを使って発信する実践という、二つの小さなラジオの実験的な試みが紹介される。著者は問う。ケアされるのはリスナーなのか、ボランティアなのか。「聞く」だけではなく「語る」というケアのかたちに着目した『悩み続けるラジオ』など、当事者によるメディア発信の意義についても言及されているが、これらは社会の中で孤立しがちな人々とラジオの関係を新たに作り直す実験であり、表現と発信とケアの関係性について考えさせられる。

第6章「声のコンテンツとケア」ではこれまでの議論を踏まえ、対話と語り、ナラティブという視点から、ケアと声のメディアについてまとめられており、終章「再び、これからのラジオ」では、「誰かのため」あるいは「自分のため」に来る日も来る日もしゃべる社会変革のツールとして、あるいは「マスメディアやアルゴリズムに制御されたネット空間では出会えない人々の声を聞くメディア」として「人々が互いにいたわりあい、理解しあえる小さなケアのメディア」（225-226頁）が各地で立ち上がることへの希望で結ばれている。

本書を貫いているのは著者の「ケアの倫理」の声である。

著者は、晩年、一人ぼっちでひとり娘の著者しか話し相手がいなかった父親のことを思い、小さなケアのメディアへの希望を述べているが、評者にとっても病院という場所は著者同様に、父親を見舞う家族としての経験を思い出す空間である。病室でのひとりの時間は長い。そして何より淋しい。病状が深刻であればあるほど、不安と孤独感が募る。入院中は誰かと電話でおしゃべりすることもままならず（当時、携帯電話は存在しなかった）、「淋しんぼう」の彼は誰かが来るのをずっと

待っていた。仕事を終えて、父親の待つ病室に立ち寄り、面会時間終了まで病室で過ごしたものであったが、夜になって病院をあとにするときは彼の淋しさがじんわりと伝わってくるようだった。きっと、もっと誰かの声を感じていたかったに違いない。きっと、誰かに自分の声を聞いてもらいたかったに違いない。評者もまた父親を想い、あの時、ホスピタルラジオなど小さな声のメディアがあれば、彼の淋しさを少しは紛らわせることができたのではないかと思う。

私たちはなぜこんなにも淋しくて、なぜ、こんなにも誰かの声が必要なのだろう。そしてなぜ、誰かに声を聞いてもらいたいのだろう。

最後に、著者の「なぜ、ラジオなのだろう」(13頁)という問いに重ねて「なぜ、声なのだろう」という問いについて少し考えてみたい。

その応答の一つとして、再び、ギリガン(1982=2022)に立ち戻ってみよう。「ケアの倫理」が提出されたのは『もうひとつの声で』(原題は *In a Different Voice*)であった。声とはどういう意味なのかと問われたギリガンは、声とは単純に声なのだと答えている。声は「強力で心理的な楽器にして回路」であり、「内部世界と外部世界とをつないで」いるもので、「語ったり耳を澄ませたりすることは、魂が呼吸する一つの形式」なのだ(ギリガン, 1982=2022: 27頁)。

そして声をめぐっては、私たちは「声をもって、いいかえれば、自分たちの経験を伝え合う能力と一人ぼっちではなく関係性の中で生きたいと願い欲求とをもって、この世に生まれてくる」のであって、「関係性こそが、人生を生き抜き、幸せを成就する鍵」(ギリガン, 1982=2022: 10頁)なのだとしてギリガンは述べている。

誰かの声に耳を傾け、誰かに語り掛け、そして誰かとつながりあう。

「なんとなく、答えなんか知らないから、誰かにいまの気持ちをわかってほしい、誰かとつながっていたい」(14頁)という、ささやかなコミュニケーションがそこにあることが、私たちの「人生を生き抜き、幸せを成就する鍵」となるのだ。

声は寄り添う。声でつながる。そして、声はケアをする。

そして、そこに当たり前にあるその声が、私たちにとっていかに大切なものであるかということ、本書は改めて気づかせてくれるように思う。

参考文献

- ギリガン, キャロル (1982) 『もうひとつの声で: 心理学の理論とケアの倫理』(川本隆史・山辺恵理子・米典子訳, 2022) 風行社.
 小玉美意子 (2012) 『メジャー・シェア・ケアのメディア・コミュニケーション論』学文社.
 林香里 (2011) 『〈オンナ・コドモ〉のジャーナリズム: ケアの倫理とともに』岩波書店.